

来年2019年10月—宣教のための特別月間



カトリック長崎大司教区
広報委員会

〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095-843-3869
FAX 095-843-3417

振替口座 01880-5-2699

発行人 山田良秋

印刷所 株式会社 藤木博英社

バチカン・ニュースから

教皇フランシスコは9月12日(水)日本の「天正遣欧使節顕彰会」の関係者とお会いになった。この席で教皇は「皆さんのこの訪問を機会に、来年、訪日したい」とわたくしが望んでいることをお伝えしたいと思ひます。実現を期待します」と述べられた。

「喜びがなければ、だれの心も引き寄せられない」

教皇フランシスコ2017年9月7日ボゴタにて

昨年2017年、教皇フランシスコは来年2019年10月を「宣教のための特別月間」とすることに決めた。長崎教区でもこの「特別月間」を有意義なものにしようとして、具体的な準備を進めることとなつた。

はじめに：教皇の言葉

2017年6月3日、教皇フランシスコは教皇庁宣教援助事業総会参加者の謁見の折、教皇ベネディクト15世の使徒的書簡「マキシムム・イルド」⁽¹⁾発布100周年にあたる19年10月を、「諸国民への宣教」について祈り、考える特別な期間とするよう、全教会に求めたいと話した。その中で、「他者が主に出会えるよう働きかけなければなりません。それは、あかしすることと、主と自分との人格的な出会いに他者もあづからることによってなされます。教会の使命とは、神の愛をあらゆる人とりわけ神のいくしみをもつとも必要としている人に届けることです。

最初の福音化として宣教のために祈り、宣教について考えるこの特別な月は、教会の信仰を刷新するために役立つでしょう」(一部抜粋)と語った。続いて同月22日、教皇は福音宣教省長官フェルナンド・フィヨローニ枢機卿に書簡を出した。(以下要旨)

「特別月間」を過ごすために

宣教の使命は、「全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ16・15)といふイエスの永続的な命令に対する応

2017年6月3日、教皇フランシスコは教皇庁宣教援助事業総会参加者の謁見の折、教皇ベネディクト15世の使徒的書簡「マキシムム・イルド」⁽¹⁾発布100周年にあたる19年10月を、「諸国民への宣教」について祈り、考える特別な期間とするよう、全教会に求めたいと話した。その中で、「他者が主に出会えるよう働きかけなければなりません。それは、あかしすることと、主と自分との人格的な出会いに他者もあづからることによってなされます。教会の使命とは、神の愛をあらゆる人とりわけ神のいくしみをもつとも必要としている人に届けることです。

最初の福音化として宣教のために祈り、宣教について考えるこの特別な月は、教会の信仰を刷新するために役立つでしょう」(一部抜粋)と語った。続いて同月22日、教皇は福音宣教省長官フェルナンド・フィヨローニ枢機卿に書簡を出した。(以下要旨)

^(注1) 1919年11月30日発布。教皇ベネディクト15世はこの書簡を通して、福音を告げ知らせるという宣教の使命に新たな推進力を加えようとした。

長崎教区でも取り組み

教皇の意向を受け、長崎教区でも教区評議会のメンバーを中心構成される「宣教のための特別月間」準備委員会が立ち上がった。第1回会議は9月30日(日)開催。教区シノドスの目標を推進するに当たり、フランシスコ教皇様から大きな励ましをいたいたいと思いました」(教区本部事務局長)



信仰を続けている人々を思い

第43回大村殉教祭



「旅」の始まり150周年(1868—2018)を迎えた出来事を思い起こして後世に残すために7月にロザリオの祈りが作られました。この祈りは、中町教会で顕彰されている「聖トマス西と15殉教者」の列聖25周年(2012年)で作成された16聖人の玄

年がたとうとしていますが、人類全体を見渡すと教会にゆだねられていく主の使命はまだ始まつばかりです」(教区の宣教活動⁽⁵⁾)。

このことに関して聖ヨハネ・パウロ2世は、「キリストが来られてから二千

年の道、そして自己奉獻の道を進むべきです」(主の使命⁽¹⁾)と記しました。

わたしは使徒的勧告「福音の喜び」の中での緊急を要する呼びかけを

に、全力でかかわらねばならないことがわかります」(主の使命⁽¹⁾)と記しました。

聖体、みことば、個人もしくは共同体としての祈り。

1. 教会の中に生きておられるイエス・キリストとの人格的な出会い――

2. 世界における教会の独自の表れである、聖人、殉教した宣教者、証聖者のあかし。

3. 「諸国民への宣教」に関する聖書的教理的、靈的、神学的な養成。

4. 広範囲にわたる福音宣教活動、とりわけもつとも困窮している教会で「諸国民への宣教」とキリスト者養成を行うための物的支援としての宣教的な愛のわざ。

9月2日(日)大村殉教祭が開催されました。午前10時からは放虎原殉教地で高見三明大司教司式によるみことばの祭儀が行われました。その中で、大村殉教祭実行委員会から、大村純忠に始

まった大村でのキリスト教の広がり、禁教令の下の郡崩れと呼ばれる弾圧と厳しい殉教の様子、

そして禁教令が解かれたのち、県内に散らばって

いた信徒が大村に戻り、教会の再興のために力を尽くしたことが語られました。

午後1時からはシーハットおおむらさくらホールにて広島教区司

祭グエン・クアン・トゥ

アン神父様を講師に「今

ある信仰への迫害」ベトナムの教会から

が厳しい拷問をうけ殺害されました。現在「ベ

トナムの殉教聖人」と呼

ばれている117人の司

教皇の要請を受け、福音宣教省長官は17年12月3日に書簡を発表。その中

で「イエスの宣教を教会の核心として

とらえ、それを教会の構造の効率性、教

会の使命に對する応

て準備しました。

先を見据えて、旅の始

まり175周年(2004

3年)、200周年(2

068年)の時に、かつての150周年の時に何

をしたのか、子孫に何を

残したのか、その具体的な事として作成されたこのロザリオの祈りが、今後祈りのうちに歴史の事実を伝える大きな役割を果たすことを切に願っています。

長崎中地区司祭団

に取り組むことになり、古

史の研究、話し合い、言葉

史料としての祈り。

1. 教会の中に生きておられるイエス・キリストとの人格的な出会い――

2. 世界における教会の独自の表れである、聖人、殉教した宣教者、証聖者のあかし。

3. 「諸国民への宣教」に関する聖書的教理的、靈的、神学的な養成。

4. 広範囲にわたる福音宣教活動、とりわけもつとも困窮している教会で「諸国民への宣教」とキリスト者養成を行うための物的支援としての宣教的な愛のわざ。

9月2日(日)大村殉教祭が開催されました。午前10時からは放虎原殉教地で高見三明大司教司式によるみことばの祭儀が行われました。その中で、大村殉教祭実行委員会から、大村純忠に始

まった大村でのキリスト教の広がり、禁教令の下の郡崩れと呼ばれる弾

壓と厳しい殉教の様子、

そして禁教令が解かれたのち、県内に散らばって

いた信徒が大村に戻り、教会の再興のために力を尽くしたことが語られました。

午後1時からはシーハ

ットおおむらさくら

ホールにて広島教区司

祭グエン・クアン・トゥ

アン神父様を講師に「今

ある信仰への迫害」ベトナムの教会から

が厳しい拷問をうけ殺

害されました。現在「ベ

トナムの殉教聖人」と呼

ばれている117人の司

教皇の要請を受け、福音宣教省長官は17年12月3日に書簡を発表。その中

で「イエスの宣教を教会の核心として

とらえ、それを教会の構造の効率性、教

会の使命に對する応

て準備しました。

先を見据えて、旅の始

まり175周年(2004

3年)、200周年(2

068年)の時に、かつての150周年の時に何

をしたのか、子孫に何を

残したのか、その具体的な事として作成されたこのロザリオの祈りが、今後祈りのうちに歴史の事実を伝える大きな役割を果たすことを切に願っています。

長崎中地区司祭団

に取り組むことになり、古

史の研究、話し合い、言葉

史料としての祈り。

1. 教会の中に生きておられるイエス・キリストとの人格的な出会い――

2. 世界における教会の独自の表れである、聖人、殉教した宣教者、証聖者のあかし。

3. 「諸国民への宣教」に関する聖書的教理的、靈的、神学的な養成。

4. 広範囲にわたる福音宣教活動、とりわけもつとも困窮している教会で「諸国民への宣教」とキリスト者養成を行うための物的支援としての宣教的な愛のわざ。

9月2日(日)大村殉教祭が開催されました。午前10時からは放虎原殉教地で高見三明大司教司式によるみことばの祭儀が行われました。その中で、大村殉教祭実行委員会から、大村純忠に始

まった大村でのキリスト教の広がり、禁教令の下の郡崩れと呼ばれる弾

壓と厳しい殉教の様子、

そして禁教令が解かれたのち、県内に散らばって

いた信徒が大村に戻り、教会の再興のために力を尽くしたことが語られました。

午後1時からはシーハ

ットおおむらさくら

ホールにて広島教区司

祭グエン・クアン・トゥ

アン神父様を講師に「今

ある信仰への迫害」ベトナムの教会から

が厳しい拷問をうけ殺

害されました。現在「ベ

トナムの殉教聖人」と呼

ばれている117人の司

教皇の要請を受け、福音宣教省長官は17年12月3日に書簡を発表。その中

で「イエスの宣教を教会の核心として

とらえ、それを教会の構造の効率性、教

会の使命に對する応

て準備しました。

先を見据えて、旅の始

まり175周年(2004

3年)、200周年(2

068年)の時に、かつての150周年の時に何

をしたのか、子孫に何を

残したのか、その具体的な事として作成されたこのロザリオの祈りが、今後祈りのうちに歴史の事実を伝える大きな役割を果たすことを切に願っています。

長崎中地区司祭団

教会はいつも新しくなる
⑨

信じる

お告げのマリア修道会 志願院 Sr. 山添睦美

会話の大切さ

中高生とのかかわりの中で会話を大切を感じます。それは、中高生に限らず誰にでも言えることなのかもしれません。特に、年齢が離れば離れるほど言葉の使い方や考え方も違つてくることがあります。自分の考えで相手を理解しようとすると、うまくいかないよう気がします。例えば、神様の存在が当たり前のことを思つて話をしていると、「神様は目に見えないから、いるかどうか分からぬ」という返答に驚いたことがあります。修道者の召命についての話どころか、まずはそこから始めないと、いふことが大きなかな要因であり、まさに見本となるはずの親自身が神様への信仰を子どもたちに伝えることが難しくなっているのではないかと思ひます。勝手な思い込みや決めつけ、判断をしないで、会話を通して相手の気持ちを知り、また、自分の気持ちを伝えていくことを大切にしたいと思います。神様の存在さえ実感できないのに、教会に行かないといふことがあります。

中高生とのかかわりの中で会話を大切を感じます。それは、中高生に限らず誰にでも言えることなのかもしれません。特に、年齢が離れば離れるほど言葉の使い方や考え方も違つてくることがあります。自分の考えで相手を理解しようとすると、うまくいかないよう気がします。例えば、神様の存在が

中高生とのかかわりの中で会話を大切を感じます。それは、中高生に限らず誰にでも言えることなのかもしれません。特に、年齢が離れば離れるほど言葉の使い方や考え方も違つてくることがあります。自分の考えで相手を理解しようとすると、うまくいかないよう気がします。例えば、神様の存在が

る信仰を祈りの雰囲気の中で感じ、また、自分たちのためにいつも祈つてくださっていることを訪問して初めて実感し、感謝の心が出てきます。日ごろの感謝を込めて自己紹介と歌のプレゼントをするとき泣いて喜んでくださったり、「お祈りしとるけんね、頑張ってね」と声を掛けてくださつたりと教会共同体のつながりを感じているようです。それは、召命の道を歩んでいく上で大きな支えとなっています。

また、沖縄平和学習にもなるべく参加するようにしています。その体験はまさに「百聞は一見に如かず」です。どんなに平和について学んだとしても、それはただの知識にしかなりません。だからといって、平和の時代では考えていることが違つたり、表現の仕方が違つたりします。自分の考えで相手を理解しようとすると、うまくいかないよう気がします。例えば、神様の存在が

この姿に、カトリック信徒としての誇りが感じられます。自分の目で見

て確かめて、そして、周りの方々にも伝えていく喜びを感じているように見えました。ここまで自信をつけるには、どのような積み重ねと背景があるので

しょうか。社会人として仕事をしながらも、手を抜かないで取り組むその原

動力は何なのでしょうか。それは、もしかしたら、させられているのではなく、信じて任せられていることにあるのではありません。

また、今年中学生で受け身だった子

どもが、来年はリーダーとして活動することについて、どんな気持ちなのか

になります。「来年からはリーダーだけ大丈夫?」と質問すると、「早くリーダーとして活動したいです。来年が楽

しみです」という思いがけない言葉が返つきました。3日間、同じグループで一緒に行動をしていて、特別楽し

くというと嫌々来たのではないかと思

うほど消極的だったので、みんなの前

で話をするのは苦手だらうと思つてい

たからです。しかし、5年生の時から

年と子どもの鍊成会に参加させて

いただきました。この鍊成会は、リーダーとなる高校生、大学生、社会人いわゆる青年たちが主体となつて、小

学生3年生から中学3年生までの子どもたちと、2泊3日のスケジュール

で、其に祈り、学び、遊び、分かち合

いを通じて、互いの信仰の喜びを確認

しました。

さらに、低学年の子どもに手を焼いているリーダーに「大変ね」と声をかけると、「えっ!!」と反対に驚かれていました。神様のことを伝えたことは、少々の困難があつても大丈夫

です。と言われているような気がしました。他の教区のことなので、教会共

体がどのようなシステムになつていませんが、信じて任せることしか言え

ませんでした。また、神父様やシスターも専ら

参加者としての立場に徹していく、共に歩むことが大切なではないかと感じ

出掛け、体験する

今の時代は、テレビ・パソコンなどの電子機器によって情報はあふれ、いち早く手にすることはできる便利です。しかし、情報は豊かでもいません。志願院では行事のない大司教区主催ですので、当然大司教区も参加されていましたが、驚いた

事実が、神様の存在を確信できていなかったのです。それは、先ほども触れたことで、神様の存在を確信できていな

いことが大きなかな要因であり、まさに見本となるはずの親自身が神様への信仰を子どもたちに伝えることが難しくなっているのではないかと思ひます。それならばなおさらのこと、教会共同体で子どもたちを教会の家族の一員として育んでいく必要があると思います。勝手な思い込みや決めつけ、判断をしないで、会話を通して相手の気持ちを知り、また、自分の気持

ちを伝えていくことを大切にした

べきだと思います。神様の存在さえ実感できないのに、教会に行かないといふことがあります。信徒の方々の神様に対する

このように、お互いの考え方を理解するためには、やはり、会話を歩み寄りが大切だと思います。相手の気持ちが理解できても、自分の意見を意地でも通すとなると、うまくいかないのではないかと思います。ただの一例に過ぎませんが、よくよく教會に足が向くようになるのかもしれません。

このように、お互いの考え方を理解するためには、やはり、会話を歩み寄

